# 思い出す人々

西山　厚　全24回

## 第16回【兄】

兄は詩を書いていた。今も書いている。

中学生の時に萩原朔太郎と出会い、兄は変わった。兄は必ず声に出して詩を読んだので、萩原朔太郎、室生犀星、三好達治、中原中也、立原道造、富永太郎らの詩は、私の耳にも心にもなじんだ。

でも私は詩を書かなかったし、詩集も読まないが、吉野弘さんのこの詩（以下、後半部分）は忘れがたい。

花が咲いている
　すぐ近くまで
　虻（あぶ）の姿をした他者が
　光をまとって飛んできている
私も　あるとき
誰かのための虻だったろう
あなたも　あるとき
私のための風だったかもしれない

Aがあるから Bがある。Aがなければ Bはない。私も、あるとき、あなたのための Aだったのかもしれない。まるで仏教の縁起の思想のようだ。繰り返される生と死。その境がなくなり、一瞬、永遠を垣間見た。

公益社団法人 俳人協会